九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「こゝろ」の告別 : 『三太郎の日記』の一節を補助線として

髙槻, 侑吾
九州大学大学院地球社会統合科学府 : 博士後期課程一年

https://doi.org/10.15017/1901735

出版情報：九大日文. 29, pp.15-38, 2017-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

「こゝろ」の告別

――『三太郎の日記』の一節を補助線として――

髙槻侑吾（TAKATSUKI Yugo）

一、先生の「決心」

漱石にとって「こゝろ」[1]（『東京朝日新聞』大正三年四月二十日～八月一日、原題「心 先生の遺書」）という小説は、新聞小説家としての、あるいは「彼岸過迄」（『東京朝日新聞』明治四十五年一月二日～四月二十九日）に始まる「個々の短篇を重ねた末に、其の個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組」（「彼岸過迄に就て」『東京朝日新聞』明治四十五年一月一日）むという試みの集大成にあたる作品である。そのことを示すかのように、漱石自ら執筆した単行本『心』（岩波書店 大正三年九月）の「広告文」（『時事新報』大正三年九月二十六日ほか）は、自信に満ちた筆致で書かれている。

自己の心を捕へんと欲する人々に、人間の心を捕へ得たる此の作物を奨む。

ここから、実体なき「人間の心」の実態を捕捉することに成功したという、自作に対する漱石の自負が読み取れる。

「人間の心」の実態とはいかなるものか。一つには、「人間の心」は「動く」[2]ということが挙げられよう。「心が動く」とはすなわち、心のありようがある状態から別の状態へと変化することである。たとえば、「決心（する）」という表現を例にとって考えてみる。以下に、先生を行為主体として「決心（する）」という表現が用られている例を小説中から抜き出して示す[3]。なお、引用文中の括弧内は引用者による補足である。

①「私は永く故郷を離れる決心を其時に起したのです」（下・9）

②「私は思ひ切つて奥さんに御嬢さんを貰ひ受ける話をして見やうかといふ決心をした事がそれ迄に何度となくありました」（下・16）

③「叔父に欺まされた私は、是から先何んな事があつても、人には欺まされまいと決心したのです」（下・16）

④「三度目の夏は丁度私が永久に父母の墳墓の地を去らうと決心した年です」（下・20）

⑤「奥さんに御嬢さんを呉れろと明白な談判を開かうかと考へたのです。然しさう決心しながら、一日〳〵と私は断行の日を延ばして行つたのです」（下・34）

⑥「果して御嬢さんが私よりもKに心を傾むけてゐるならば、此恋は口へ云ひ出す価値のないものと私は決心してゐたのです」（下・34）

⑦「始めは向ふ（＝K）から来るのを待つ積で、暗に用意をしてゐた私が、折があつたら此方で（Kが御嬢さんを好きである

か否かを聞く）口を切らうと決心するやうになつたのです」（下・39）

⑧「私が進まうか止さうか（＝Kに御嬢さんとの結婚の話をしようかしまいか）と考へて、兎も角も翌日迄待たうと決心したのは土曜の晩でした」（下・48）

⑨「自分で自分を鞭つよりも、自分で自分を殺すべきだといふ考が起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行かうと決心しました。／私がさう決心してから今日迄何年になるでせう」（下・54）

⑩「死んだ積で生きて行かうと決心した私の心は、時々外界の刺戟で躍り上がりました」（下・55）

⑪「それから（＝乃木が殉死してから）二三日して、私はとう〳〵自殺する決心をしたのです」（下・56）(4)

⑫「私が死なうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分は貴方に此長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい」（下・56）

これらの例から、「決心（する）」という表現は、先生が強い意志を持って重大な決定をする場面で用いられていることがわかる。なかでも注目すべきは、「下・54」以降（⑨～⑫）で先生が自らの「死」や「自殺」に言及する際に繰り返し用いられていることである。何年も前に「死んだ積で生きて行かうと決心した」先生は、乃木の殉死に心が動いで、「とう〳〵自殺する決心を」固める。先生が何かを「決心する」と言うとき、その裏側で先生の心は動いているのである。

いま、「決心（する）」という表現に着目することで先生の心の動きを浮かび上がらせてみた。漱石が「こゝろ」という小説で「捕へ得たる」「人間の心」の実態とは、たとえばいま見たような、自殺を決心するにいたる人間の心の動きであり、そうした心の動きとその背景を丁寧に見ていくことが、「こゝろ」という小説の可能性を探る手がかりとなるであろう。

二、「自殺」への引き金

すでに柄谷行人が「『こゝろ』の隠された主題は自殺である」(5)と述べているように、「こゝろ」という小説は〈先生が自殺を決心する物語〉である。先生はつねに「死」を意識しており、そのことは先生の発言からも窺える。以下に示す二つ発言は、その好例である。

一つは、「私は病気になる位なら、死病に罹りたいと思つてる」（上・21）という発言である。ここでの「死病」は、治癒が見込まれない「死」に直結するような病、もっと言えば、「自殺」を意識したものであろう。ここには、長く続く苦しみよりも一瞬で解放される苦しみを選ぶという、先生の「死」に臨む態度が表れている。いま一つは、「よくころりと死ぬ人があるぢやありませんか。自然に。それからあつと思ふ間に死ぬ人もあるでせう。不自然な暴力で」（上・24）という発言である。「自然に」「ころりと死ぬ」というのは、この直前で話題に出た、

先生の「知つたある士官」が「腎臓の病」で急死したことを指していると思われる。一方、「不自然な暴力」で「あつと思ふ間に死ぬ」というのは「自殺」のことである。先生はこの直後でも、「自殺する人はみんな不自然な暴力を使ふんでせう」と繰り返すが、この「暴力」という語に冠された「不自然な」という修飾語は、先生の思考が自殺の方法に及んでいることを意味している。

これら二つの発言は、「死」を意識したものであるどころか、「自殺」をも匂わせるものである[6]。にもかかわらず、先生は最後まで「自殺する訳」を明確には語らない。語っているとすれば、〈遺書〉の末尾近く（下・55、56）で、明治天皇の崩御によって死ぬ時機を見いだし、乃木の殉死に触発されて「自殺する決心をした」ということだけである。以下、〈遺書〉に即して見ていく。

明治天皇が崩御したとき、先生は「明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つた」ような気がし、「最も強く明治の影響を受けた」自分たちが「其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだ」という感じに「烈しく」胸を打たれる。先生が奥さんにそう言うと、奥さんは「では殉死でもしたら可からうと調戯」うが、先生は、このときすでに自らの死ぬ時機を見いだしていたのである。そのうえで、「もし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だ」（傍点は引用者）と答えるのである[7]。

ただし、ここで注意したいのは、先生の〈殉死宣言〉はあくまでも仮定に過ぎないことである。なぜなら、このときまだ乃木は殉死しておらず、先生にとっての殉死は現実感（リアリティ）を伴わない「笑談に過ぎな」いものだからである。実際、先生は「殉死」という言葉を「殆んど忘れて」おり、奥さんの「笑談を聞いて始めて」思い出す。それが、明治天皇の崩御から一ヶ月ほど経って乃木が死んだとき、「殉死」の二文字が急に生々しさを帯びたものとして先生の眼前に立ち現れてくる。先生は乃木の殉死を報じる号外を手にして、思わず奥さんに「殉死だ〳〵」と言い、それから二、三日して「自殺する決心」を固める。

ところが、先生は最後まで自らの死を「殉死」であるとは断定しない。それどころか、「乃木さんの死んだ理由が能く解らない」と言い、乃木の殉死に対して距離を置いているようにさえ見える。〈遺書〉の少し前で、乃木の殉死に触発されて自殺を決心したかのように語っていたにもかかわらず、である。先生は乃木の生々しい死とは対照的に、奥さんに「血の色を見せず、「頓死」か「気が狂つた」かと思われるような方法で「こつそり此の世から居なくなる」（下・56）という。そのように考えると、先生にとっての「殉死」は、乃木のように身をもって明治天皇に殉ずることではなく、「明治」という時代が醸成した〈空気〉とでも呼ぶべき「明治の精神」を胸のうちに感じながら、静かに、自殺することだったのではなかろうか[8]。

こうして、先生の「自殺する訳」も「明治の精神に殉死する」ことの意味も語られないまま、先生の〈遺書〉は閉じられる。

それでは、先生はなぜ、乃木の殉死に触発されて自殺を決心したかのように語ったのであろうか。そのことを明らかにする

ために、先生の〈遺書〉にある次の一節に着目する。

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死なう〳〵と思つて、つい今日迄生きてゐたといふ意味の句を見た時、私は思はず指を折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながらへて来た年月を勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年迄には三十五年の距離があります。乃木さんは此三十五年の間死なう〳〵と思つて、死ぬ機会を待つてゐたらしいのです。私はさういふ人に取つて、生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらうと考へました。／それから二三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。（下・56）

先生が新聞で読んだ「乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたもの」とは、乃木の「遺言」[9]を指していると思われる。そのなかで先生が関心を抱いたのは、「死なう〳〵と思つて、死ぬ機会を待つてゐた」乃木にとって、「生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらう」かということである。もちろん、先生の出した結論は、〈「生きてゐた三十五年」の方が「苦しい」〉である。そのように考えると、先生は乃木が殉死した「理由」を理解しようとしたのではなく、殉死するにいたった乃木の〈心の動き〉に共感したのではなかろうか。そうであるからこそ、「乃木さんの死んだ理由が能く解らない」にもかかわらず、乃木の殉死に触発されて自殺を決心したという〈矛盾〉が生じたのである。

何年も前に「死んだ積で生きて行かうと決心した」先生と、三十五年のあいだ「死なう〳〵と思つて、つい今日迄生きてゐた」乃木の境遇は、もっとも根本的な部分で近似しているといえる。つねに「死」を意識する先生が、これから先も「死んだ積で生きて行」くことと一瞬で「死」にいたる「自殺」を比較したとき、「自殺」を選ぶのは当然の帰結であったといえる。

思えば、先生は次のようにも言っていた。

必竟私にとつて一番楽な努力で遂行出来るものは自殺より外にないと私は感ずるやうになつたのです。（下・55）

私は今日に至る迄既に二三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進まうとした事があります。（下・55）

明治天皇の崩御によって自らの死ぬ時機を見いだした先生にとって、乃木の殉死は先生の「頭脳に訴へる」代わりに、先生の「心臓（ハート）を動か」すものだったのである。先に「こゝろ」という小説を〈先生が自殺を決心する物語〉と称したゆえんである。

三、乃木の殉死と漱石

浅井清は、漱石の新聞小説における「時事性」について、「（引用者注：『虞美人草』の）博覧会と同じ位の比重を持っているのは『こゝろ』の乃木殉死であろう」としたうえで、「その他多少の軽重はあるにしても社会的事件や話題を作品に取りこんだ例」として、「『三四郎』では丹青会の展覧会、文芸協会の公演、『それから』では東京高商の学校騒動、比太利の地震、土耳古の内乱、『煤煙』の評判、日糖事件、東洋汽船事件、幸徳秋水への尾行、新設された赤いポスト、『門』では伊藤博文の暗殺、キチナー元帥（ママ）の来日、ベスト・セラーとなったポケット論語、『彼岸過迄』では、児玉音松の死、『行人』では文芸協会の公演」などを挙げている[10]。

いまここで詳述することはしないが、浅井氏が指摘している「社会的事件や話題」はほとんどの場合、同時期ないしは比較的早い段階で小説に取り込まれており、「時事性」の演出に貢献しているといえる。ところが、『こゝろ』の乃木殉死」に関しては、出来事から小説までのあいだに約二年という時間的懸隔があるため、「時事性」の演出のみを狙って小説に取り込んだと見るには少し〈ズレ〉があるように思われる。大正三年という時期であれば、必ずしも乃木の殉死を取り込む必要はなく、「こゝろ」の先生は別の理由で自殺を決心してもよかったはずである。そのように考えると、この微妙な〈ズレ〉には何か別の背景があるのではなかろうか。

ところで、漱石自身は乃木の殉死をどのように捉えていたのであろうか。自らの小説に取り込んでいる以上、少なからず関心を抱いていたことは想像される。しかし、漱石は当初、日記に所感を記すどころか明確な言及すらしていなかった[11]。わずかに言及が見られるものを挙げれば、明治四十五年から大正元年にかけての「断片」には「■乃木大将の事。同夫人の事」（「断片五八C」）、「〇乃木大将の事」（「断片五九B」）とあり、漱石が乃木の殉死に対して一定の関心を抱いていたことは窺えるが、その内実は不明である。また、漱石が小宮豊隆に宛てた書簡（大正元年九月二十八日付）に「御尻は最後の治療にて一週間此所に横臥す。僕の手術は乃木大将の自殺と同じ位の苦しみあるものと御承知ありて崇高なる御同情を賜はり度候」とあるが、これも自らが経験した痔の手術に伴う苦痛を、乃木の殉死を引き合いに出して諧謔的に記しているに過ぎない。創作においても、「初秋の一日」（『大阪朝日新聞』大正元年九月二十二日）と題する小品[12]の末尾で、「御大葬と乃木大将の記事で、都下で発行するあらゆる新聞の紙面が埋まつたのは、夫から一日置いて次の朝の出来事である」と、わずかに触れているだけである。

漱石が乃木の殉死に明確に言及したのは、大正二年十二月十二日に第一高等学校で行われた講演「模倣と独立」においてである。講演のなかで漱石は、ただ「形式」だけを「真似する」「模倣」（「イミテーション」）よりも「深い背景を持つた」「独立」（「インデペンデント」）が重要であることを、乃木の殉死を例にとって説明している。その際、乃木の殉死は「至誠より出たもの」であり、「深い背景を持つ」ものとして〈評価〉している。

ただし、ここで留意しなければならないのは、この評価はあ

くまでも「模倣と独立」について論じる過程でなされたものであり、その意味においてきわめて文脈依存的だということである。さらに、「至誠」という言葉についても、乃木の人物像や殉死を論じる同時代言説でしばしば用いられるため[13]、先の評価がどこまで漱石自身の見解を反映しているか定かではない。

こうして見てくると、漱石が乃木の殉死について〈正面〉から論じている例はなく、それゆえに、漱石が乃木の殉死に対する言及を回避ないしは保留しているようにさえ見える[14]。

では、そうした漱石がなぜ、大正三年に発表された「こゝろ」に乃木の殉死を取り込んだのであろうか。

ここで、先に言及した〈「こゝろ」の先生が別の理由で自殺を決心する〉ということに関わって、「こゝろ」の前作である「行人」（『東京朝日新聞』大正元年十二月六日～同二年十一月十五日。うち、大正二年四月八日～九月十五日は休載）の「自殺」と比較してみる。

「行人」の一節に、親友Hと旅行中の一郎が「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない」（塵労・39）と言い出す場面がある。「神経衰弱」を抱えている一郎は、自らの「前途」を自殺、発狂、信仰のいずれかに見いだそうとするが、信仰については「何も這入れさうもない」ため、自殺についても「未練に食ひ留められさうだ」からとして、「なればまあ気違だな」というところに落ち着く。このあと一郎は、「然し将来の僕は偖置いて、現在の僕は君（＝H）正気なんだろうかな。もう既に何うかなつてゐるぢやないかしら。僕は怖くて堪まらない」と話題を現実に引き戻すため、これ以上「自殺」に思いを巡らせることはしない。しかし、「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない」（傍点は引用者）という「絶望」にも近い切羽詰まった発言から、一郎の考える「自殺」が「神経衰弱」という個人的な問題と深く結びついていることがわかる。

これに対して「こゝろ」の先生の場合は、「もし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だ」と宣言し、「私（＝先生）に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに、貴方（＝「私」）にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もし左右だとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません」と言っているところからわかるように、「自殺」が〈時代〉や〈世代〉といった社会的な問題と結びついている。

このように、「行人」と「こゝろ」という二つの作品は、発表順こそ隣接しているが、登場人物（一郎と先生）が考える「自殺」の背景には明確な〈断絶〉が見られる。つまり、「行人」では「神経衰弱」という一郎自身に関わる個人的な問題であったのが、「こゝろ」では〈時代〉や〈世代〉といった社会的な問題へと変化しているのである。

こうした変化の背景にあるものは何であろうか。もちろん、乃木が殉死する以前の段階ですでに「行人」の構想が固まっており、新たに取り込む余地がなかったと見ることもできよう。しかし、先に見た一郎の発言場面が描かれている「塵労」は、五ヶ月にわたる休載期間を経て掲載された章であり、しばしば

構想の変化が指摘される箇所でもある。[5] そうした事情を踏まえれば、漱石が休載期間中に当初の構想を変更し、連載再開後の「塵労」で一郎に乃木の殉死について語らせることもできたはずである。あるいはもっと言えば、乃木の殉死を契機として一郎を「自殺」させることもできたはずである。にもかかわらず、「こゝろ」に乃木の殉死を取り込んだということは、そこには単なる「時事性」の演出ではない、別の背景があると考えるべきではなかろうか。

そこで、この別の背景について明らかにするために、漱石と関係の深いある人物とその著作に着目する。

四、阿部次郎と夏目漱石

大正期教養派を代表する人物のひとりに阿部次郎がいる。阿部の著作である『三太郎の日記』[16]が最初に出版されたのは、大正三年四月のことであった。大正三年四月といえば、折しも漱石が『東京朝日新聞』で「こゝろ」の連載を開始した時期である。[17]「朝日文芸欄」の執筆をきっかけに漱石と交流があった。[18] 阿部は漱石に自著を贈り、次のような葉書を受け取っている。

拝啓三太郎日記御寵贈にあづかり難有御礼申上候あの「三太郎日記」といふ名は小生の好まぬものに候中味は読んだのとよまないのとありいづれ拝見致す心得に候御礼迄　匆々

（大正三年四月九日付、阿部次郎宛葉書）

漱石の葉書にある「「三太郎日記」といふ名は小生の好まぬもの」という一節について、三好行雄は「きわめて冷淡」[19]な反応と言い、桶谷秀昭も「本のタイトルが気に入らないという、よそよそしいもの」[20]と額面どおりに解釈しているが、果たしてそれでよいのであろうか。むしろ漱石は、『三太郎の日記』（本稿では、大正三年四月刊行の東雲堂版を指す）を肯定的に評価しているのではなかろうか。

漱石が嫌悪感を示した「三太郎」という擬人名には「愚者」という意味があり、主人公の「青田三太郎」という名前は「あはゝの三太郎」や「大馬鹿三太郎」といった「愚者」を想起させる。[21] 阿部自身は『三太郎の日記』という題について、漱石に宛てた葉書（未投函）で次のように述べている。

三太郎の日記と云ふ題に賛成してくれたのは今迄唯本屋だけで多くの友人はみないけない〳〵と申しますが当人にはまだ何処が悪いのだか本当にのみ込めません。多分私の現在の人格的くさみをシンボライズしてゐる名なので、私の人格が一段高いところにのぼらなければ、当人にはわからないのだらうと存じます

（大正三年四月二十日付、夏目金之助宛葉書（未投函））

阿部は主人公に「青田三太郎」という名前を付けた理由を、「私の現在の人格的くさみをシンボライズしてゐる」ためと説

明しているが、ここには阿部なりの謙遜が表れているといえよう。結果的にこの葉書が漱石の手許に届くことはなかったが、漱石は『三太郎の日記』という題から阿部の謙遜を読み取り、先の葉書に「「三太郎日記」といふ名は小生の好まぬものに候（漱石の心中を代弁すれば、中身に対して題が相応しくないということ）」と記すことで、阿部の自著に対する必要以上の謙遜に拒否を示したのである。このことは裏を返せば、漱石は『三太郎の日記』の中身を高く評価していたということである。

元来漱石は、自らの能力を〈安売り〉することや必要以上に謙遜することを嫌う傾向にあった。そのことは、東京朝日新聞社への入社に際して自らの待遇（とりわけ、「月給」や「賞与」）を繰り返し確認していることや、森田草平に宛てた書簡で、

君の批評を見ると普通の雑誌記者抔よりも遙かに見識が見える。よくよんで居る。だから自分の作物上にでも其見識は応用され得るに相違ない。／僕は君に於て以上（引用者注：引用箇所以前の内容も含む）の長所を認めて居る。何故に萎縮するのである。今日大なる作物が出来んのは生涯出来んといふ意味にはならない。たとひ立派なものが出来たつて世間が受けるか受けないかそんな事はだれだつて受け合はれやしない。只やる丈やる分の事である。

（明治三十九年二月十五日付、森田米松宛書簡）

と激励していることからも窺える。こうした考えを持つ漱石が、阿部の必要以上の謙遜に対して拒否を示したとしても不思議ではない。

さらに、漱石の阿部に対する評価に関わって、阿部自身による興味深い言及がある。それによると、阿部が鈴木三重吉、森田草平、小宮豊隆、安倍能成らとともに「ホトヽギスから『五人集』といふ小説集を出して貰ふことにし」た頃、漱石が「今の若い者で思想（ケダンケ）を取扱ふ資格のある者は次郎位のものだ」と言っていたのを小宮から聞いたという。[23] このことから、漱石が阿部を自立したひとりの人間（哲学者）として高く評価していたことが窺える。そのように考えると、やはり先の一節は額面どおりに解釈すべきではなく、漱石の阿部に対する逆説的な讃辞と見るのが妥当である。

以上から、漱石は『三太郎の日記』を高く評価しており、阿部に対するまなざしも、決して「冷淡」で「よそよそしいもの」ではないといえる。

この漱石が高く評価した『三太郎の日記』のなかに、「ニイチェはしば〳〵「別れの時」と言ふ言葉を使つた」という印象的な書き出しで始まる一編がある。「別れの時」と題されたこの文章は、明治天皇崩御後の日本社会の状況（第一章）と乃木の殉死に対する阿部の私見（第二、三章）を論じたもの[24]であり、「時事問題に具体的に立ちいって触れているのは『三太郎の日記』でも珍らしい」[25]ことである。このなかで阿部は、「客観的に見て日本の文明が「別れの時」に臨んでゐる」にもかかわらず、「「別れの時」の感覚が痛切に人々の主観を襲つて来ない」

のは、「保守」と「急進」の「対立」に問題があるためだと主張する。さらに、「乃木大将の悲壮なる死をもつてするもこの問題に鉄案を下して、反対者を強ひるの権利なきはいふまでもない」と言い、乃木の殉死を擁護するとともに「自由討究」の必要性を提起している。

新聞小説家である漱石にとって、この文章が注目に値するものだったであろうことは想像に難くない。先に漱石が乃木の殉死に対する言及を回避ないしは保留しているように見えると述べたが、その漱石が大正三年に発表された「こゝろ」に乃木の殉死を取り込んだ背景には、この阿部の「別れの時」があったのではなかろうか。

「こゝろ」という小説では、原題「心 先生の遺書」からわかるように、連載開始時点で先生が「遺書」を残して自殺することはすでに決まっていた。しかし、漱石が小説の構想段階で結末まで見通せていたはずはなく、日々の連載を重ねるなかで先生が自殺へと向かう具体的な描写を練り上げていったと考えられる[26]。そうした状況のなかで、阿部から贈られた『三太郎の日記』で読んだ「別れの時」に触発されて、小説の末段で先生が自殺を決心する心的情況を乃木の殉死とした可能性は十分に考えられる。

もちろん、漱石自身は「こゝろ」の執筆に際して「別れの時」を参照したとは述べていない。しかし、両者のあいだに影響関係があると見ることで、先に指摘した〈漱石が大正三年に発表された「こゝろ」に乃木の殉死を取り込んだのはなぜか〉、〈「行人」から「こゝろ」にかけて登場人物が考える「自殺」の背景が変化したのはなぜか〉といった疑問が一気に氷解する。

「別れの時」と「こゝろ」の関係性をめぐっては、これまで阿部と漱石の思想的な距離を測る指標（バロメーター）として論じられる傾向にあった。たとえば、三好行雄は、

> 大正三年に書かれた「こゝろ」と、おなじ年に出た「三太郎の日記」とは、漱石と門下生との思想の距離を目に見える形で具体化している。高度の自己否定に到達し、罪の救済を、死んだ気で生きてゆくという自己処罰の逆説に賭けた先生と、個我の自立をひたすらに求め、暗黒から光明への精神の遍歴を内面世界の充足、一元化のみ捧げた三太郎との距離である。[27]

と述べ、阿部と漱石の思想的懸隔を世代間ギャップによる対立として位置づけている。しかし問題は、そうした世代論の枠組みのみで捉えてよいのであろうか。

また、桶谷秀昭は「別れの時」の一節に触れながら、

> 新と旧との戦いの一身における惨澹たる姿の新時代の人間に欠けていることを歎く（引用者注：阿部の）心情は、『こゝろ』の先生に託した漱石の内面に一等近いように思われる。[28]

と述べ、阿部と「こゝろ」の先生に投影された漱石に共通する

心情を読み取っている。

このように、三好論や桶谷論をはじめとする先行論は、「別れの時」と「こゝろ」の関係性を〈「阿部次郎」対「夏目漱石」〉という著者・作者レヴェルの人格的問題として検討しており、〈「別れの時」対「こゝろ」〉というテクストレヴェルで実証的に比較して論じてはいない。

また、「こゝろ」の研究史においても、小説の分析対象をテクストそのものへと転回させた〈テクスト論〉以降、「こゝろ」の新たな〈読み〉が提出されるようになった一方で、三好論や桶谷論が研究史の後景へと退けられ、等閑に付されたことで、「こゝろ」という小説の前提として重要であったはずの「別れの時」との文脈の問題が隠蔽される結果となった。しかし、「テクスト」が同時代言説の「引用の織物」[29]であるならば、「こゝろ」の〈プレ・テクスト〉としての「別れの時」の可能性は、決して看過することのできない問題である。

そこで、「別れの時」と「こゝろ」の関係性をテクストに即して再検討し、共通点や相違点を明らかにすることをとおして、両者の呼応関係を改めて検討し直してみたい。

五、「別れの時」と「こゝろ」

「別れの時」を横目に見ながら「こゝろ」を読み直してみると、両者のあいだには三つの類似点ないしは呼応関係とでも呼ぶべきものを見いだすことができる。具体的には、テクスト全体に関わる〈新旧世代の対立ないし懸隔〉、〈「心臓」という表象の機能〉、〈寂寞ゆえの自殺ないし殉死〉の三点である。以下、それぞれの問題について順を追って見ていく。

(1)〈新旧世代の対立ないし懸隔〉

「別れの時」の第一章では、明治天皇崩御後の日本社会の状況が論じられている。ここで問題になっているのは、「急進」（＝「新しい（き）人」）と「保守」（＝「国民精神の擁護者」）の関係性である。以下に、阿部の主張の核となる箇所を引用して示す。

> 今の世に「新しい人」をもつて自任する人は多い。一方に「過去」を理想として現実を呪ふ人もまた次第にその数を増して来る有様である。しかしいはゆる「新しい人」は果して過去の余影をとどめざる全然新しき人であらうか。いはゆる国民精神の擁護者もまた果して古代理想を一身に体現し尽した人であらうか。（中略）事実上彼らは共に半ば新しく半ば旧き、不可思議なる混血児であつて、たゞ理想上あるひは新に赴きあるひは旧に傾向するにすぎないのである。（中略）しかるに何ぞ事実はこれに反して、いはゆる「新しき人」は全然自らあづかり知らぬ者のごとくに旧を嘲り、いはゆる「国民精神の擁護者」は暴君のごとき権威と自信と——並びに無知とをもつて新を難じてゐる。かくのごときはいまだ問題をその焦点に持ち来すことを知らざる無自覚の閑葛藤であつて、哲学的にいへばいまだ真正に

「別れの時」の問題に触れざる者である。（中略）「別れの時」の時の感覚を伴はざるがゆゑに、保守と急進との理想は日本の文明においていまだ決然たる対立を形成してゐない。（中略）／いはゆる「新しき人」はまづ自己の中に在りて「旧」のいかに貴きかを見よ。見てしかしてこれを否定せよ。「別れの時」の悲哀を力として却つて更に強く「新」を肯定するの寂寥に堪へよ。いはゆる「保守」の士はまづ自己に感染して強健なる過去の本能を侵蝕せむとする「新」の前に恥ぢ且つ恐れよ。「別離」に堪へざる濃情をもつて強く「旧」を保持し、烈しく「新」を反発せよ。かくのごとくにして両者の思想に始めて真実と悲壮と深刻とがあるであらう。

（「別れの時」1）

阿部はまず、「明治」という時代の終焉によって転形期を迎えている日本社会において、「急進」と「保守」による新旧世代の対立が顕在化してきていることを指摘する。そのうえで、「真正」な「対立」が「進歩」のために不可欠であると主張している。

「真正」な「対立」とは、「急進」と「保守」とが自らの「理想」のみを主張して「無自覚」に嘲笑、非難しあう排他的な関係ではなく、両者が相手の存在を一度きちんと認識し、受容したうえで相互批判を行うという、いわば〈共生的な関係〉を志向することである。こうした新旧世代の対立における阿部の志向性が、「別れの時」という文章全体の枠組みとなっている。

一方の「こゝろ」では、「私は其人を常に先生と呼んでゐた」（上・1）という書き出しが示唆しているように、「私」と先生のあいだにある新旧世代の懸隔が小説の枠組みとなっている。その実態は、〈遺書〉のなかで先生自身が具体的に語っている。以下に、該当する描写を小説中から抜き出して示す。

私は倫理的に生れた男です。又倫理的に育てられた男です。其倫理上の考は、今の若い人と大分違つた所があるかも知れません。然し何う間違つても、私自身のものです。間に合せに借りた損料着ではありません。だから是から発達しやうといふ貴方には幾分か参考になるだらうと思ふのです。貴方は現代の思想問題に就いて、よく私に議論を向けた事を記憶してゐるでせう。私のそれに対する態度もよく解つてゐるでせう。私はあなたの意見を軽蔑迄しなかつたけれども、決して尊敬を払ひ得る程度にはなれなかつた。あなたの考へには何等の背景もなかつたし、あなたは自分の過去を有つには余りに若過ぎたのです。（「こゝろ」下・2）

今から思ふと、其頃私の周囲にゐた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入つた話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種を有たないのも大分ゐたでせうが、たとひ有つてゐても黙つてゐるのが普通の様でした。比較的自由な空気を呼吸してゐる今の貴方がたから見たら、定めし変に思はれるでせう。それが道学の余習なのか、又は

一種のはにかみなのか、判断は貴方の理解に任せて置きます。

（「こゝろ」下・29）

二つの引用の傍線部を見ると、「今の若い人」、「是から発達しやうといふ貴方」、「あなたは（中略）余りに若すぎた」、「比較的自由な空気を呼吸してゐる今の貴方がた」といったように、先生が「私」の〈若さ〉に繰り返し言及していることがわかる。[30] これらの発言から、先生が「倫理上の考」や「現代の思想問題」において、「私」との世代的懸隔を実感していることがわかる。

このように、「私」と先生のあいだには明確な世代的懸隔があるにもかかわらず、先生は若い「私」を否定することなく受け入れる。一方の「私」も、先生との交流を重ねるなかで先生を先生たらしめている「過去」に関心を抱き、「真面目に（引用者注：先生の）人生から教訓を受けたい」（上・31）という「決心」を見せる。その「決心」に応えるために、先生は自らの「過去」を物語り、「不可思議な」自分について「出来る限り」「己れを尽し」て説明する。こうした二人の関係性は、先に見た阿部が志向する〈共生的な関係〉に通じるものがあるといえよう。

しかし、このことは一方で、「私」と先生の世代的懸隔を「死」という絶望的な形で示すしかないことを意味している。つまり、「別れの時」において解消できるものとして捉えられている「急進」と「保守」の世代的対立とは異なり、「こゝろ」における「私」と先生との世代的懸隔が決して解消することのできないものであることを、先生の「自殺」によって示唆しているのである。そのように考えると、漱石が「こゝろ」のなかで描いている「私」と先生との世代的懸隔は、阿部の「別れの時」に対する違和感として読むことができるのである。

それでは、漱石は新旧世代の対立や懸隔をどのように捉えていたのであろうか。以下に、その手がかりとなる描写を先生の〈遺書〉から引用して示す。

私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに、貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もし左右だとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。或は箇人の有つて生れた性格の相違と云つた方が確かも知れません。私は私の出来る限り此不可思議な私といふものを、貴方に解らせるやうに、今迄の叙述で己れを尽した積です。（「こゝろ」下・56）

先生は、若い「私」に自分の「自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れ」ない原因として、「私」と先生の〈世代の相違〉とともに〈個性の差〉を挙げている。さらに、「時勢の推移」という言葉から〈時代の相違〉も含まれていると見てよかろう。一方の阿部は、問題を〈「急進」対「保守」〉という〈世代の相違〉からしか捉えていない。そのように考えると、漱石は新旧世代の対立や懸隔の背景に〈世代の相違〉だけではなく、〈個性の差〉や〈時代の相違〉といったものがあることを感じ取っており、そのことを先生の〈遺書〉で示したといえる。

そうすると、先に見た三好論が世代間ギャップによる対立として位置づけていた阿部と漱石の思想的懸隔の問題も、より複雑な背景を持つものとして捉え直すことができるのである。

「別れの時」は明治天皇の崩御から約三ヶ月後、乃木の殉死から約一ヶ月後に発表されたものであり、その意味において時代の転形期にあたる同時代への〈生〉の警鐘であるといえる。その〈生〉の警鐘に対するものとして、漱石は「こゝろ」において先生の〈遺書〉＝「死」という形で語ったのである。つまり、「こゝろ」が「心 先生の遺書」であるのには必然性があったのである。

こうした「別れの時」と「こゝろ」の〈差異〉は次のような点にも見いだすことができる。それは、両者における「過去」が持つ意味である。阿部は「別れの時」のなかで、「過去」について次のように述べている。

> 進む者は別れなければならぬ。しかも人が自ら進まむがために別離を告ぐるを要する処は――自らの後に棄て去るを要する処は――嘗て自分にとつて生命のごとく貴く、恋人のごとくなつかしかつたものでなければならぬ。およそ進歩はたゞ別るるを敢てし、棄て去るを敢てする点においてのみ可能である。嘗て貴く、なつかしかつたものに別離を告ぐるにあらざれば、新たに貴く、なつかしき者を享受することが出来ない。新たに生命をつかむ者は過去の生命を殺さなければならぬ。真正に進化する者にどうして「別れの時」の悲哀なきを得よう。
>
> （「別れの時」1）

阿部は、「過去」を「棄て去る」ことではじめて「進歩（進化）」が可能になると言い、その「棄て去る」べき「過去」は自らにとって「生命」や「恋人」のように「貴く」、「なつかしかつたものでなければならないとする。ここには、「進歩」のためにはそれ相応の犠牲を払わねばならぬという、「別れの時」の本質が表れているといえよう。

一方で「こゝろ」の先生は、自己の内奥に複雑な「過去」を抱え込んでいる。そして、「過去」に執着し、「過去の因果」（上・31）に束縛されている。その「過去」とは、叔父に欺かれて財産を誤魔化された過去であり、Kが自殺して死んでしまった過去である。先生ははじめ、自らの「過去」に迫ろうとする「私」に対して、「（引用者注：思想や意見ではなく）私の過去を悉く物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題にな」（上・31）ると拒絶する。その先生が、最後には「私」に宛てた〈遺書〉のなかで自らの「過去」を「残らず」物語る。先生は、その意味するところを〈遺書〉の冒頭近くで次のように述べている。

> 其上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。（中略）私は何千万とゐる日本人のうちで、たゞ貴方丈に、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから。／私は暗い人世の影を遠慮なく

あなたの頭の上に投げかけて上ます。然し恐れては不可せん。暗いものを凝と見詰めて、その中から貴方の参考になるものを御攫みなさい。（中略）私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新らしい命が宿る事が出来るなら満足です。

（「こゝろ」下・2）

傍線部の「暗いものを凝と見詰めて、その中から貴方の参考になるものを御攫みなさい。（中略）私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新らしい命が宿る事が出来るなら満足です」という箇所は、先に引用した「別れの時」の「新たに生命をつかむ者は過去の生命を殺さなければならぬ」（同じく傍線部）という一節を想起させる。先生は自らの「進歩」のために「過去」（＝「暗いもの」）を棄て去るのではなく、若い「私」の「未来」（＝「新らしい命」）のために「過去」としての自らの命を殺すことを選んだのである。

こうした先生の態度は、ある意味では「新たに生命をつかむ」ために「過去の生命を殺」す実践であるといえよう。しかし、「別れの時」と「こゝろ」では「過去」が持つ意味に明確な〈差異〉がある。「別れの時」では「進歩」のために「過去」を棄て去る（＝「過去」と生き別れる）のに対して、「こゝろ」の先生は若い「私」のために自らの「過去」を物語ると同時に、その「過去」を抱え込んだまま「自殺」する（＝「私」と死に別れる）のである。つまり、先生にとっての「過去」は決して「棄て去る」ことのできないものであり、ましてや「進歩」のためのものではないのである。

そもそも漱石は、「進歩（進化）」という概念自体をあまり信用していなかった。そのことは、「それから」（『東京朝日新聞』明治四十二年六月二十七日～十月十四日）に見られる「進化の裏面を見ると、何時でも退化である」という一節や、大阪朝日新聞社主催の講演「現代日本の開化」（明治四十四年八月、和歌山にて）での「開化」をめぐる懐疑的な発言[31]からも窺える。そのように考えると、漱石は「こゝろ」において「過去」を抱え込んだまま「自殺」する先生を描くことで、「進歩」のためには「過去」を棄て去るべきだという阿部の主張に対する違和感を表明したのではなかろうか。

「過去」とは個人や時代を形作っている、いわば〈文脈〉のようなものである。そうした個人や時代が持つ具体的な文脈を捨象し、抽象概念としての「過去」のうえに「進歩」を語る阿部の議論は、現実味を欠いた表面的なもの、漱石の言葉を借りれば「上滑り」[32]なものに過ぎないといえよう。むしろ漱石が捉えていた現実は、「進歩」という一語では片付けることのできない複雑な問題だったはずである。そして、そこにはさまざまな「過去」を背負った個人の文脈があり、「明治」の終焉という動かぬ事実が厳然と横たわっていたはずである。

「明治」という時代とともに生きてきた漱石の眼には、個人が背負っている「過去」を軽視し、時代の終焉が持つ意味の重さを感じ取っていない阿部の言表行為自体が、楽観的なものに映ったと思われる[33]。しかしこのことは、漱石が「別れの時」

を完全に否定していたということではない。むしろ漱石は「別れの時」を評価しているからこそ、「こゝろ」という小説において阿部の問題意識に応じてみせたのである。

このように、「別れの時」と「こゝろ」のあいだには、その前提となるものについて類似点や呼応関係が認められる。そして、それらの類似点や呼応関係のなかに見られる細かな〈差異〉に着目することで、「こゝろ」という小説全体に関わる漱石の問題意識を浮かび上らせることができるのである。

(2)〈「心臓」という表象の機能〉

「こゝろ」のなかに、「奥さんは私の頭脳に訴へる代りに、私の心臓（ハート）を動かし始めた」（上・19）という一節がある。この三十字にも満たない短文を印象的なものにしているのは、言うまでもなく「心臓」という一語である。[34] この「心臓」という語の機能について、「別れの時」と「こゝろ」のあいだに類似点を認めることができる。以下に、両者を横並びにして比較する。

> 概括せる断言は私の憚る処であるが、私の心臓の囁く処を何らの論理的反省なしに発言することを許されるならば、「別れの時」の感情はあらゆる真正の進歩と革命とに欠くべからざる主観的反映の一面である。あらゆる革命と進歩とに深沈の趣を与えて、その真実を立証する唯一の標識である。
>
> （「別れの時」1）

あなたは私の過去を絵巻物のやうに、あなたの前に展開して呉れと逼つた。私は其時心のうちで、始めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或生きたものを捕まへやうといふ決心を見せたからです。私の心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜らうとしたからです。（中略）私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴びせかけやうとしてゐるのです。

（「こゝろ」下・2）

「別れの時」の引用は、文章の前説にあたる箇所からのものである。ここで阿部は、自らの主張を「何らの論理的反省なしに」ありのままに述べることを宣言している。「私の心臓の囁く処」（傍線部）という部分は、修辞的な要素を取り除けば、「私が主張するところ（のもの）」という意味にしか過ぎない。それを「私の心臓の囁く処」とすることで、「囁く」という言葉がもたらす静的な印象と、脈々と鼓動を打つ「心臓」という語が持つ力強さとが相乗して効果的な文章表現を生み出している。そうすると、ここでの「心臓」は、阿部が自らのうちに秘めている主張を象徴しているといえる。「別れの時」が時代の転形期にあたる同時代への〈生〉の警鐘であることを考えれば、この「心臓」という語はより生々しいものとして同時代読者に訴えかけるものであったと思われる。

一方で「こゝろ」の引用は、〈遺書〉の冒頭近くからのものである。ここで先生は、「真面目に人生から教訓を受けたい」（上・31）という「私」の「決心」に応えるために、〈遺書〉と

いう形で自らの過去をありのままに物語ることにしたという経緯を説明している。そうすると、「私（＝先生）は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなた（＝「私」）の顔に浴びせかけやうとしてゐるのです」（傍線部）という一節に見られる「心臓」の語は、先生がこれまで自らのうちに秘めて誰にも語ることのなかった過去の出来事と、その出来事を覆って先生の胸に刻印し続ける記憶の総体としての「過去」を象徴しているといえる。

「心臓」という語がもたらす印象は、まぎれもなく臓器としての生々しさである。いま見た二つの「心臓」は、これからありのままに語られようとしている、個人の胸のうちに秘められたものを象徴している点において類似しているといえる。

(3)〈寂寞ゆえの自殺ないし殉死〉

「別れの時」の第二、三章では、乃木の殉死に対する阿部の私見が述べられている。そのなかで阿部は、乃木の「自殺」するにいたった「心情」を忖度して次のように述べている。

> 乃木大将は旅順にその二愛児を失つた。又大将は明治末期の時勢について頗る慷慨の情をいだいてゐたとの事である。この二事を根拠として推測すれば大将晩年の心情には頗る寂寞の影なきを得なかつたであらう。武士の条理に明らかなる大将がこの寂寞のゆゑに自殺したのでないことはいふまでもない。しかしこの寂寞の情が無意識に大将を動かして自殺の気分を助成したことは必ずしもないとは云はれまい。仮にかくのごとき心理作用が意識の奥に働いてゐたとしても、大将はこれを意識の明るみにひき出して自ら解剖するやうな必要は寸毫も感じなかつたであらう。徹頭徹尾殉死、もしくは責任を果たすの死と信じて、透明なる意識と幸福なる道義的自覚とをもつて自刃し得たであらう。
>
> （「別れの時」3）

一方の「こゝろ」では、先生が「Kの死因を繰り返し〳〵考へて、次のような結論にいたる。

> 私は仕舞にKが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑がひ出しました。さうして又慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと、同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚が、折折風のやうに私の胸を横過り始めたからです。
>
> （「こゝろ」下・53）

二つの引用の傍線部を比較してみると、両者のあいだに類似点を認めることができる。阿部は、「寂寞」が乃木の「自殺」の直接的な原因ではないにせよ、「寂寞の情」が「無意識」に乃木の心理に作用して「自殺」に導いた可能性を完全には否定できないという（仮にそうであったとしても、乃木はそのこと自体には何ら意味を見いださなかったであろうというのが、阿部の見方であるが）。同様に「こゝろ」の先生も、Kが「淋し」さのあまり「急に」

自殺を決心して死んでしまったのではないかという疑念を抱いている。もちろん、乃木とKで自殺するにいたった経緯はそれぞれ異なるが、自殺の原因として「寂寞」（＝「淋し」さ）が想定されている点において「別れの時」と「こゝろ」は類似しているといえる。

さらに、「こゝろ」の引用にある「急に所決する」という衝動的な行動は、「意識」では制御できなくなった心の反射的な作用によって引き起こされる、いわば「無意識」的な行動といえよう。そのように考えると、「別れの時」の「大将」は「こゝろ」の「K」に置き換え可能ということになる。試みに、置き換え後の一節を「こゝろ」のテクストに挿入してみると、

私は仕舞に寂寞の情が無意識にKを動かして自殺の気分を助成したのではなからうかと疑ひ出しました。（引用者注：傍線部が置き換え後の本文を挿入した箇所。なお、傍点は引用者）

となり、元の文脈ともきれいに符号する。漱石は、乃木が「寂寞ゆゑに自殺した」か否かという事実は別として（むしろ「こゝろ」の先生は、「三十五年の間死なう〳〵と思つて、死ぬ機会を待つてゐた」乃木の「苦し」さに共感している）、阿部が示した〈寂寞ゆえの自殺〉という心の動きに共感ないしは触発されて、「こゝろ」の先生が「Kの死因を繰り返し〳〵考」える際の描写に用いたのではなかろうか。

こうした人間の心の動きに関する記述や描写にも、「人間心理の研究者」を自称する阿部の「別れの時」と「人間の心を捕へ得たる」小説である「こゝろ」の呼応関係を見いだすことができるのである。

ここで、〈寂寞ゆえの自殺ないし殉死〉に関わって、本稿の原点でもある「こゝろ」に乃木の殉死が取り込まれた背景、すなわち先生が自殺を決心する際の心的情況として乃木の殉死が採用された背景について考える。

すでに述べたように、「こゝろ」の先生は乃木が殉死した「理由」を理解しようとしているのではなく、殉死するにいたった乃木の〈心の動き〉に共感している。つまり、先生は乃木の殉死を「頭」ではなく「心」で捉えているのである。

「こゝろ」の先生に漱石が投影されているとすれば、「私に乃木さんの死んだ理由が能く解らない」という先生の言葉は、漱石自身の実感でもあろう。漱石ははじめ、「頭」で乃木の殉死を捉えようとして、捉えることができなかったのである。

では、そうした漱石（＝「こゝろ」の先生）がなぜ、乃木の殉死を「頭」ではなく「心」で捉えるようになったのか。それは、阿部が「別れの時」のなかで乃木が殉死したわずかな可能性として示した、「寂寞の情が無意識に大将を動かして自殺の気分を助成したことは必ずしもないとは云はれまい」という見方に触発されたからである。漱石が〈寂寞ゆえの自殺〉という心の動きに関心を抱いていたであろうことはすでに指摘したが、漱石はここから、乃木の殉死を「頭」ではなく「心」で捉える視点を獲得したのである。そのうえで、乃木の「遺言」の論理で

はなく心理を読み、阿部の〈乃木の殉死＝寂寞ゆえの自殺〉とは異なる自らの理解を「こゝろ」という小説において示したのである。そのように考えると、「こゝろ」の先生による乃木の殉死理解は、同時に漱石自身による理解の結果でもあるといえる。以下、小説の描写に即して見ていく。

先生は新聞で乃木の「遺言」を読んで、「三十五年の間死なう〳〵と思つて、死ぬ機会を待つてゐた」乃木の境遇と、何年も前に「死んだ積で生きて行かうと決心した」自らの境遇とを重ねあわせる。そして、これから先も「死んだ積で生きて行」くことと一瞬で「死」にいたる「自殺」を比較して、とうとう「自殺」を決心する。

漱石は、そうした先生が自殺を決心するにいたった心の動きを、乃木のそれとして「遺言」から感じ取っていたはずである。そして、そこに自らの問題意識に通じるもの見いだし、「こゝろ」という小説において先生が自殺を決心する際の心的情況として乃木の殉死を採用したのではなかろうか。

漱石の問題意識とはすなわち、〈生きていることと死ぬことはどっちが苦しいか〉ということである。これは「吾輩は猫である」以来の漱石の問題意識であった。そのことを示す苦沙弥の発言を、以下に引用して示す。

> 死ぬ事は苦しい、然し死ぬ事が出来なければ猶苦しい。神経衰弱の国民には生きて居る事が死よりも甚しき苦痛である。従つて死を苦にする。死ぬのが厭だから苦にするのではない、どうして死ぬのが一番よからうかと心配するのである。(35)

「自殺」と「神経衰弱」の問題については、本稿で言及した「行人」にも描かれている。もちろん、乃木は神経衰弱ではないであろうし、「こゝろ」の先生についてもここではひとまず措く。しかし、これらの作品で描かれている〈生きていることと死ぬことはどっちが苦しいか〉という問題意識は近似しているといえる。そのように考えると、「こゝろ」という小説は漱石における問題意識の到達点として位置づけることができるのではなかろうか。その意味においても、「こゝろ」における乃木の殉死は重要な意味を持っているのである。

このように、「こゝろ」に乃木の殉死が取り込まれた背景は、阿部の「別れの時」に触発された漱石が、「心」で捉えた乃木の殉死に対する理解を示すとともに、自らの問題意識と関わらせる形で先生の「自殺」を描くためであった。「頭」ではなく「心」で捉えるという視点を自らが獲得したからこそ、漱石は「こゝろ」を「人間の心を捕へ得たる」小説であると自負しているのかもしれない。

ここまで、「別れの時」と「こゝろ」の関係性をテクストに即して再検討し、両者のあいだに見られる類似点や呼応関係を明らかにしてきた(36)。その結果、「こゝろ」の執筆に際して阿部の「別れの時」が漱石の目に触れていた可能性がきわめて高く、「別れの時」を「こゝろ」の〈プレ・テクスト〉として位置づ

けることは十分に可能であるといえる。

「遺書」とはすなわち「別れの書」である。「こゝろ」の先生は乃木の殉死に触発されて自殺を決心し、「別れの書」を残して、「私」との、奥さんとの、そして「明治」という時代との〈別れの時〉を迎えるのである。

六、阿部の感懐

『三太郎の日記』の著者である阿部は「こゝろ」の一読者でもあった。阿部が漱石に宛てた二通の書簡（うち一通は未投函）には、「こゝろ」の読後感が記されている。以下に、該当箇所を引用して示す。

食ふための仕事が一寸手すきになつて自分自身のことを考ふべき一週間ばかりの余裕が与えられた最初の日にこゝろを拝誦いたしました　始めのうちは可なり緩んだ心持で跟いて行きましたが「先生と遺書」の後半で「先生」が自分で自分が頼りにならなくなるところの描写に来ると眼が醒めたやうにハツとしました　さうして私は又この小説でも先生からでなければ与えられないものを与へられたやうな気がしました　私はこの御礼を申上るためにこの手紙を書きます

（大正三年十一月十九日付、夏目金之助宛書簡（未投函））

先日は久しぶりでお目にかかつていゝ気持ちになつて遅くまで御邪魔いたしました／昨日こゝろを拝見いたしました　いつも同じやうなことを申上ますが遺書の後半を非常に面白く拝見いたしました　後半といふのは「先生」が自分で自分がたのみにならなくなる彼処以後です　あゝ云ふ心持を書いてくれる人は先生の外にはないと有難く思ひました

（大正三年十一月二十日付、夏目金之助宛書簡）

いずれの書簡にも見られる、「先生と遺書」の「後半」で「先生」が自分で自分が頼り（たのみ）にならなくなる」箇所とは、「下・52」から「下・56」にかけてのあたりだと思われる。なかでも、先生がKの自殺した原因を繰り返し考えて、Kが自分のように「たつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではないか」と疑い出す場面の心理描写は、「別れの時」において阿部が乃木の殉死するにいたった心情を忖度して、「寂寞の情が無意識に大将を動かして自殺の気分を助成したことは必ずしもないとは云はれまい」とする記述に通じる部分がある。

阿部が、そうした「こゝろ」と自らの文章とに通じるものを読み取ったとき、その類似性を「非常に面白く」感じたのかもしれない。あるいは、「こゝろ」の先生による乃木の殉死理解に、自らの文章に対する漱石の応答らしきものを感じ取ったとき、不意に「眼が醒めたやうにハツと」したのかもしれない。

【注記】

1　作品名の表記について、本稿では原則として「こゝろ」に統一した。

2　小説中でも、「先生に会へるか会へないかといふ好奇心も動いた」（上・4）、「あなたの心はとつくの昔から既に恋で動いてゐるぢやありませんか」（上・13）、「好奇心が既に動いてゐたのです」（下・11）といったように、「心が動く」という表現が用いられている。

3　先生以外の人物を行為主体として「決心（する）」という表現が用いられているものは、たとえば「私」を主体とした以下のものが挙げられる。なお、括弧内は引用者による補足である。

①「（先生宅の玄関先で先生と奥さんの「言逆ひ」を聞いた私は）すぐ決心をして其儘下宿へ帰つた」（上・9）

②「私は、とう〳〵（国へ）帰る決心をした」（上・21）

③「私にはたゞ年が改たまつたら（卒業論文を）大いに遣らうといふ決心丈があつた。私は其決心で遣り出した」（上・25）

④「私（＝先生）は其時心のうちで、始めて貴方（＝「私」）を尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或生きたものを捕まへやうといふ決心を見せたからです」（下・2）

こうして見てみると、「下　先生と遺書」において「決心（する）」という表現が持つ意味の重さを改めて確認することができる。

4　この部分について、漱石の自筆原稿では当初、「私はとう〳〵自殺する事に極めました」となっていたが、冒頭に「それから二三日して、」が加えられ、文末も「自殺する決心をしたのです」というより強い表現に改められている。こうした点からも、「こゝろ」という小説において先生が自殺を決心することがいかに重要な意味を持っているかわかるであろう。

5　「意識と自然」（『増補　漱石論集成』平凡社　二〇〇一年八月）

6　本文で挙げた箇所以外にも、「上・35」で先生が「おれが死んだら」という発言を繰り返し、奥さんから「縁喜でもない」と注意されるなど、先生が自らの「死」に言及する場面は小説中にしばしば見られる。

7　「明治の精神」をめぐっては、これまでに多くの論が提出されてきた。それらの一部（終戦前後から昭和五十一年頃までに発表されたもの）は、小泉浩一郎「戦後研究史における「漱石と『明治の精神』」」（『文学的近代の成立』有斐閣　一九七七年六月）において整理、検討されている。

また、仲秀和『「こゝろ」研究史』（和泉書院　二〇〇七年三月）も、同時代評及び戦前から平成十八年頃までに発表された「こゝろ」論を年代別に整理、検討するなかで随時「明治の精神」に関する論に言及している。もちろん、両氏による整理、検討後にも多くの論が発表されており、それらを含めて研究史を捉え直す必要があることは言うまでもない。この点については、稿を改めて論じたい。

8　「明治の精神」が意味するところについては性急に結論が出せないため、本稿では以下の点を問題提起するにとどめる。それは、漱石自身が「明治の精神」をどのように捉えていたかということである。生成論的な視点からいえば、「其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終わつたやうな気がしました」という一文は、漱石の自筆原稿では「其時私は明治■天皇に始まつて天皇に終■■■■■」（引用者注：■は一字の塗りつぶしを表す）となっており、前者には「の精神が」が、後者には「つたやうな気がしました」が挿入されている。そのように考えると、「明治の精神」という言葉が漱石のなかであらかじめどの程度具体的な内容を伴ったものとして想定されていたかが問題になる。筆者はこの問い対する具

体的な回答を持ち合わせてはいないが、少なくとも加筆前後の意味の差異に注目しながら、より多面的に「明治の精神」が意味するところを検討していく必要があるように思われる。この点については、前掲注7で言及した研究史の問題とあわせて稿を改めて論じたい。

9　乃木の「遺言」から「こゝろ」の描写に関わる箇所を引用しておく。

遺言条々

第一自分此度御跡を追ひ奉り自殺候処恐入候儀其罪は不軽存候然る処明治十年役に於いて軍旗を失ひ其後死処得度心掛候も其機を得ず皇恩の厚に浴し今日迄過分の御優遇を蒙り追々老衰最早御役に立の時も無余日候折柄此度の御大変何共恐入候次第茲に覚悟相定め候事に候

（『国民新聞』（号外）大正元年九月十六日）

10　「漱石と新聞小説」（『講座　夏目漱石』第四巻　有斐閣　一九八二年二月）

11　こうした漱石の反応は、同世代の森鷗外とは大きく異なっている。鷗外はドイツ留学時代から交流が続く乃木の死に無関心ではいられず、「興津弥五右衛門の遺書」（「中央公論」第二十七年第十号　大正元年年十月）を執筆することで、直ちに乃木の殉死を擁護する意見を表明した。

12　この作品は漱石の実体験をもとにしており、「明治」という時代の終焉に対する漱石の感慨が、「初秋」という季節と重ねあわせるように描かれている。なお、本作品は『大阪朝日新聞』に掲載後、単行本等には収録されなかった。

13　これに対して、明治天皇の崩御に関する記述（記録）ないし言及は多く見られる。たとえば、明治天皇崩御直後の日記には、「〇七月三十日〔火〕午前零時四十分　陛下崩御の旨公示。同時践祚の式あり」をはじめとして、「〇三十一日〔水〕に改元の詔書あり」、「〇朝見式詔勅」、「〇大正元年七月三十一日斎藤海軍大臣及上原陸軍大臣を宮中に召され陸海軍人に左の詔勅を賜ふ」、「〇右に対する陸軍大臣の奉答文（中略）／海軍大臣の奉答」、「〇朝見式勅語に対する西園寺首相の奉答」、「〇三十一日拝訣式並に納棺式」、「〇一日の新聞に左の広告を出したるものあり」、「〇輻車（牛車）」、「〇御輦（青山より桃山迄）」（以上、「日記一一B」）といった見出しで、新聞記事から書き写した詔勅や行事に関する詳細な記述（記録）が残されている。

また、森円月に宛てた書簡（大正元年八月八日付）では、「明治のなくなったのは（あなたと）御同様何だか心細く候」、「国民（新聞）は此度の事件にて最もオベツカを使ふ新聞に候オベツカを上手の編輯といへば彼の右に出るもの無之候いづれにしても諸新聞の天皇及び宮庭に対す言葉使ひ極度に仰山過ぎて見ともなく又読みづらく候」（引用者注：括弧内は引用者による補足）と言い、「明治」という時代の終焉に対する感慨と、明治天皇の崩御をめぐる新聞報道のあり方に不快感を示している。

14　たとえば、大正元年七月二十七日付『東京朝日新聞』の「●乃木大将の至誠」という記事では、乃木の人物像に対して「至誠」を用いている。以下に、当該記事を引用する。

各元老、大臣、元帥、親任官、同待遇、公爵等数百名は　聖上陛下御発病以来日日参内天機を奉伺しつゝあるが其内乃木大将は毎日午前六時、午前十時、午後六時の三回宛参内岡侍医頭、徳大寺侍従長より御経過を拝聴し片時も御悩みの御軽減あらせられん事を祈誓し居れり大将の至誠何時もながら感佩に堪へずと某大官は物語り居たり

一方、乃木の殉死を論じるなかで「至誠」を用いている例としては、同九月十五日付『東京朝日新聞』の「●身を棄てゝ君に報ず　▽三宅雪

嶺博士談」という記事が挙げられる。以下に、該当箇所を引用して示す。

▲是非曲直の弁　は容易に断じられんが其の是非以外に痛切に人心に響く所に権威がある即ち議論に超越して居る点に価値は存する元老に響かざるも学者の間に響く、青年子弟の間には更に痛切に響き棒で頭を叩かれた如く感ずるであらう今更殉死の是非を彼是言ふ如きは迂遠極まる西洋人と雖もゼネラル乃木が死んだと聞けば決して悪く思ふ事はない至誠の威力は其処に存する匹夫は窮すれば縊死もするが身は大将たり伯爵たる人が死すると云ふ事は容易な事ではないから軽々に忖度してはならぬのである

15 代表として、伊豆利彦「『行人』論の前提」（「日本文学」第十八巻第三号　一九六八年三月）がある。

16 『三太郎の日記』の構成、出版経緯等に関しては、佐々木靖章「阿部次郎『三太郎の日記』の構成―資料を中心として―」（「茨城大学教育学部紀要」第二十四巻　一九七五年三月）に詳しい。

17 『三太郎の日記』と「こゝろ」の先後関係については、『三太郎の日記』の刊行は大正三年四月一日、「こゝろ」の初出は同四月二十日である。

18 漱石と阿部の関わりについては、原武哲「阿部次郎」（原武哲、石田忠彦、海老井英次編『夏目漱石周辺人物事典』笠間書院　二〇一四年七月）に詳しい。

19 「漱石山脈の稜線」（『三好行雄著作集』第二巻　筑摩書房　一九九三年四月）

20 「淋しい「明治の精神」―『こゝろ』」（『増補版　夏目漱石論』河出書房新社　一九八三年六月）

21 宮武外骨『日本擬人名辞書』（半狂堂　大正十年五月）の「三太郎」の項には、「愚者をいふ、あはゝの三太郎、大馬鹿三太郎に同じ」とある。

22 漱石が東京朝日新聞社との仲介役を担った坂元雪鳥に宛てた書簡には、「手当の事　其高は先日の仰の通りにて増減は出来ぬものと承知して可なるや」、「何年務めれば官吏で云ふ恩給といふ様なものが出るにや、さうして其高は月給の何分一に当るや」（以上、明治四十年三月四日付書簡）、さらには、「俸酬は御申出の通り月二百円にてよろしく候。但し他の社員並に盆暮の賞与は頂戴致し候。是は双方合して月々の手宛の四倍（？わからず）位の割にて予算を立て度と存候」（同三月十一日付書簡）とある。

23 「夏目先生の談話」（「思潮」第一巻第八号　一九一七年十二月）。引用は、『漱石全集』別巻（岩波書店　一九九六年二月）に拠った。なお、引用文中にある「『五人集』といふ小説集」は、明治四十四年四月一日発行の「ホトヽギス」（第十四巻第九号）に掲載された、小宮豊隆「寒き影」、東渡生（筆者注：安倍能成）「長兄」、阿部次郎「狐火」、鈴木三重吉「女」、森田草平「御殿女中」の五つの作品を指していると思われるが、当該雑誌の目次等には「『五人集』」という題は見当たらない。

24 「別れの時」は、原題「時感数則」（筆者注：そのときに感じたいくつかのこと）として『読売新聞』の「文芸欄」に大元年十月八日、九日、十一日の三日に分けて掲載された。このときの「上」「中」「下」の章立てが、『三太郎の日記』での「1」「2」「3」の章立てと対応している。

また、『三太郎の日記』収録本文の末尾には「十月六日」という日付が記されており、これら一連の文章が明治天皇の崩御から約三ヶ月後、乃木の殉死から約一ヶ月後に執筆された同時代言説であることがわかる。

25 北住敏夫、佐々木靖章「注釈」（『日本近代文学大系　第三十五巻　阿部次郎・和辻哲郎集』角川書店　一九七四年七月）

26　さらに、漱石のあとに連載を予定していた志賀直哉の降板によって連載終了日が後退し、構想の変更を余儀なくされたという裏事情も相まって、小説の結末が容易には定まらなかったであろうことは想像に難くない。

27　前掲注19同書。

28　前掲注20同書。

29　ロラン・バルト『物語の構造分析』（花輪光訳、みすず書房　一九七九年十一月）

30　「私」の〈若さ〉に関しては、徳永光展『夏目漱石『心』論』（風間書房　二〇〇八年三月）に言及（先行論の整理、用例の分析等）が見られる。

31　漱石は「開化」がもたらす負の側面について次のように述べている。

開化と云ふものが如何に進歩しても、案外其開化の賜として吾々の受くる安心の度は微弱なもので、競争其他からいら〳〵しなければならない心配を勘定に入れると、吾人の幸福は野蛮時代とさう変りはなさゝうである

32　「現代日本の開化」（明治四十四年八月、大阪朝日新聞社主催による和歌山での講演）

33　こうした漱石のまなざしは、阿部に対してのみならず、いわゆる「次代の青年」と呼ばれる大正文学者たちにも向けられていたと思われる。たとえば、武者小路実篤は、「乃木大将のやうに一地方的の思想に身を殺すやうなことで満足したくない」（「国民的と世界的」「白樺」第三巻十二号　大正元年十二月、無車「三井甲之君に」の一節）と言い、乃木の殉死を「伯夷叔斉や屈原の死よりももつと世界的の分子がかけてゐる」、ゴッホの自殺と比べて「残念なことには人類的な所がない」（「人類的、附乃木大将の殉死」同）と批判しているが、個人が背負っている「過去」の文脈を考慮せず、時代の終焉が持つ意味の重さを感じ取っていないこの議論もまた、漱石には楽観的なものに見えたはずである。

34　小森陽一は『『心（こゝろ）』における反転する〈手記〉―空白と意味の生成―』（『構造としての語り』新曜社　一九八八年四月、原題「こころ」を生成する心臓（ハート）」「成城国文学」第一号　一九八五年三月）において、「心臓」や「血」の表象に着目し、「古い「血」の論理＝「家族」の倫理を捨てた「私」が、「「頭（ヘッド）」ではなく「心臓（ハート）」でかかわっていた「奥さん」と出会い」、「〈「奥さん」―と共に―生きること〉」の可能性を論じている。

35　「吾輩は猫である（十一）」（「ホトゝギス」第九巻第十一号　明治三十九年八月）

36　さらに、「別れの時」と「こゝろ」には次のような呼応関係らしきものも見られる。阿部は「別れの時」のなかで乃木を「完全なる理想主義の人」（「別れの時」3）と述べているが、「こゝろ」のKもまた理想主義的な性格を持っているといえる。以下に、そのことが垣間見える描写を小説中から抜き出して示す。なお、適宜本文を改変した。

①「寺に生れた彼は、常に精進といふ言葉を使ひ」、「彼の行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるやうに、私（＝先生）には見えた」（下・19）

②「仏教の教義で養はれた彼は、衣食住について兎角の贅沢をいふのを恰も不道徳のやうに考へてゐる」（下・23）

③「精神的に向上心がないものは馬鹿だと云」う（下・30）

④「Kは昔しから精進といふ言葉が好」で、「道のためには凡てを犠牲にすべきものだと云ふのが彼の第一信条」である（下・41）

もちろん、Kのモデルは乃木希典ではないが、小説中の「罪のないK

は穴だらけといふより寧ろ明け放しと評するのが適当な位に無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管してゐる要塞の地図を受取つて、彼の眼の前でゆつくりそれを眺める事が出来たも同じでした」（下・41）という日露戦争時の二〇三高地における攻防を想起させる描写は、旅順要塞の攻略を指揮して多くの死傷者を出した乃木に対する漱石の批判ともとれよう。そのように考えると、漱石はKに理想主義的な性格を付与し、「自殺」という形で〈殺す〉ことによって、〈乃木＝理想主義の人〉という見方に対する違和感を表明したと見ることもできるのではなかろうか。

ただし、この点については更なる検討を要するため、本稿では注で指摘するにとどめる。

※　漱石の小説はほとんどの場合、『東京朝日新聞』と同時期に『大阪朝日新聞』にも掲載されたが、本稿では後者の書誌情報については割愛した。

※　漱石の小説、講演、書簡、日記及び断片の引用は、すべて『漱石全集』（岩波書店　一九九三年十二月～一九九九年三月）により、必要な場合を除いてルビ等は省略した。

※　阿部次郎の著作及び書簡の引用は、すべて『阿部次郎全集』（角川書店　一九六〇年十月～一九六六年二月）により、ルビ等は省略した。また、旧字体は原則として通行の字体に改めた。

※　引用文中の傍線はすべて引用者による。また、「／」は改行を表している。

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程一年）